

## 幻のモスクワ五輪日本代表選手

岐阜市立岐阜商業高等学校  
校長 林 田 仁

毎年、インターハイ県予選や地区のインターカレッジが開催される今の時期になると決まって思い出すことがあります。1980年(昭和五十五年)大学を卒業して岐阜県の高校教員に採用され、県立中濃高校に赴任した年のことでした。この年に、共産圏で初めてソビエト連邦の首都モスクワで夏季オリンピックが開催されました。

しかし、前年12月にソビエト連邦がアフガニスタンに侵攻し、これに反発したアメリカ合衆国が抗議のボイコットを強行しました。アメリカ合衆国と親密な関係にある日本もこの年の2月に、追従してボイコットすることになったのです。

日本オリンピック委員会(JOC)はこの日本政府の決定に反発して、その後も出場を模索しましたがままたまならず不参加が確定し、金メダルの常連種目の柔道や体操競技、バレーボール・レスリングなどをはじめ、開催全種目において代表選手を選考し、モスクワ五輪日本代表選手としてその名を後生に残すことになりました。これらの選手達がいわゆる「幻のモスクワ五輪日本代表選手」なのです。

開催前に代表選手達の記者会見が行われ、陸上競技男子マラソン代表の瀬古利彦選手や柔道無差別級代表の山下泰裕選手、レスリングの高田裕司選手らが涙ながらにカメラに向かって派遣を訴えるシーンが今も目に浮かびます。

陸上競技の代表18名の中には、母校筑波大学陸上競技部の同期生で主将を務めた長尾隆史選手が400mハードル代表に名を連ねていました。400mを高校新記録で全国制覇した彼は、大学進学後も400mハードルで日本人初となる50秒切りや、1600mリレーのエースとして、チームをまとめながらインカレで大活躍するに留まらず、日の丸を胸に付けて何度も国際大会に出場していました。在学中は、毎日壮絶なトレーニングを自身に課す中で、どの講義も休まずに最前列で懸命にノートを取る彼の姿に、同期の誰もが感動を覚えていました。しかも、リーダーとしての思いやりに富み、明るくお洒落で、流行に敏感な彼の悪口を言う仲間は一人もいませんでした。

ある年のインカレでハードルを引っかけた転倒したことがありました。人知れず、スランプや故障に悩んだ事も多かったと思います。大学卒業後も現役を続け、日本の第一人者として代表の座を見事に射止めたが、このボイコットによってモスクワでの快走は水泡と化してしまいました。五輪開催中にはどんな気持ちで中継や報道に接したのでしょうか。「推して余りあり」です。4年後のロサンゼルスオリンピック代表を目指して、日本の第一人者であり続けた彼でしたが、残念ながら代表に選ばれることなく、程なくして現役を退きました。その後、郷里で教鞭をとり、指導主事や課長としてスポーツ振興を支えた彼は、4月から岡山県立水島工業高校の校長として勤務しています。

第二次世界大戦では「学徒出陣」や「特攻隊」等で多くの若者が亡くなりました。その中には幾多の有望選手達も含まれていました。また、「郷土の雄」沢田文吉先生(ヘルシンキ五輪棒高跳6位入賞)のように、敗戦国として1952年(昭和27年)まで五輪出場が認められずに、選手としてのピークを過ぎて金メダルを逃した選手も少なくありません。

そして今、女子サッカーがアジアを制し、男子バドミントンが世界一になったニュースが飛び込んできました。プロ野球交流戦がスタートし、程なく男子サッカーのワールドカップが開幕します。好きな種目を選んで、指導者や用具、練習場所など全ての環境が整った中で練習や試合ができる現代の若きアスリート達に、自身の恵まれ過ぎた環境を再認識していただくとともに、世界を制する新しいスターの誕生を待ち望みたいと思います。